

吉川 永祐
北原 明峰
松川 祐実

何かを忘れて
いるような
気がする。

Sym
企画公募
金沢市民芸術村アート工房

Kanazawa Citizen's Art Center
金沢市民芸術村
PITS ● アート工房

Sym-企画公募2021

何かを忘れていたような気がする。

2022.1.15(土) - 23(日)

金沢市民芸術村 アート工房

吉川 永祐

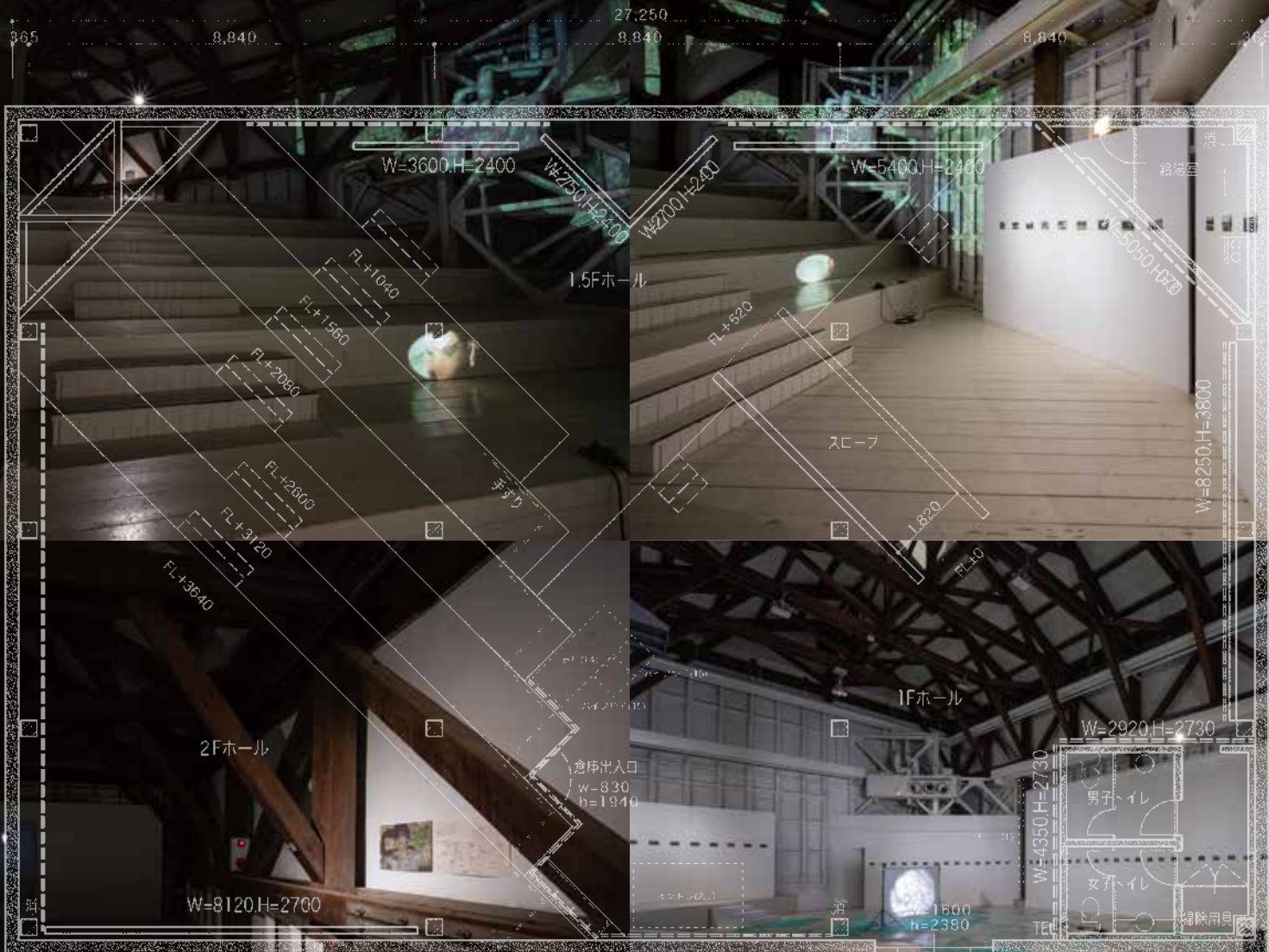
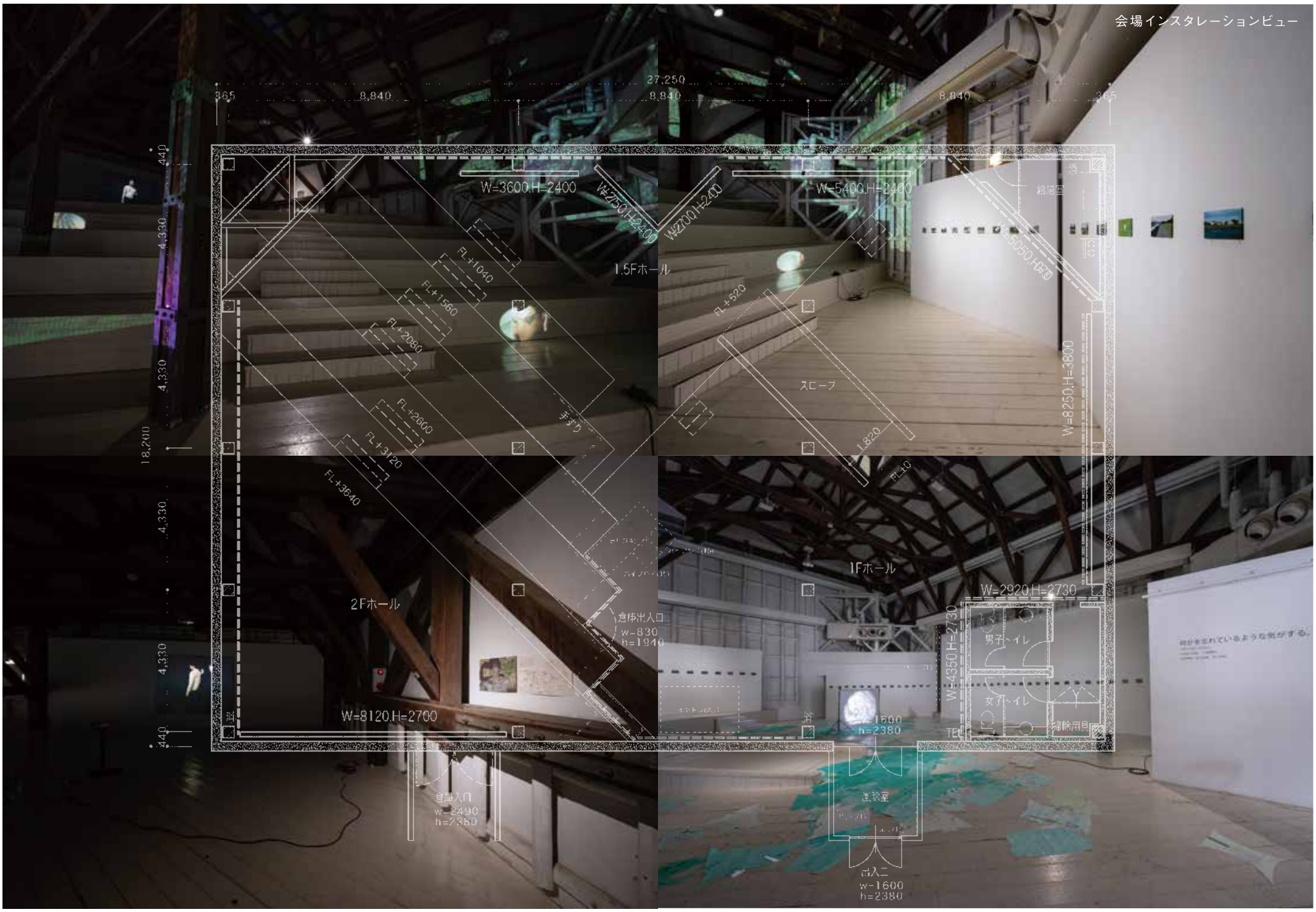
北原 明峰

松川 祐実

アート工房ディレクター

宮崎 竜成

モンデンエミコ





[Body Map # 歩く]

1-6のアクションの映像と音声(a-f)によって構成される映像インスタレーション。(a-f)は芸術村アート工房内に点在するように配置されている。

1.吉川の自宅から金沢市民芸術村まで歩く。その時、歩く音を時の録音する→音声a
2.1の道のりをプロジェクターで身体に映し、カメラで道を辿る→映像b③3.b撮影時に撮った自撮り→映像c(壁面に投影)④4.1の道のりを北原さんに伝えながら吉川の皮膚に地図を描いてもらう→映像d

5.dの道を松川さんにカメラで辿ってもらう→映像e④6.d,eの様子→映像、音声f(北原さんの作品に重なるように投影)

僕たちは普段、何を見ながら、何に従いながら街を歩いているんだろう。

地図を開けばある程度の場所には自由に行くことができる。地図に記された記号や名称と目の前に広がる景色を結びつけながら、目的地までの経路を導き出す。手元の地図と、目の前の景色を行ったり来たり、脇見をしながら道を歩く。地図というツールを用いて街を把握すること、歩くことについての捉え直しを試みた。

まず今回の展示場所である金沢市民芸術村まで歩いてみることにした。地図は見ずに、最短ルートも検索せずに「金沢駅の近く」ぐらいの認識で、とりあえずiphoneで録音だけして歩いてみた。次に金沢の街をプロジェクターで身体に移し、iphoneで自分が歩いた道を辿ってみた。身体が街に、iphoneが歩行者に成り代わる。撮影中、地図が映し出される自分の姿が妖怪みたいだなあと思って自撮りを撮った。

次に北原さんに自分が歩いた道のりを口頭で伝えて、皮膚に描いてもらった。描く人によって道の長さやランドマークの大きさ、有無が異なる。北原さんの描く地図は自分の知らない病院や施設があって面白かった。スタート位置は臍。ゴールは設定しない。支持体(吉川)の描き心地や部位に影響を受けてどのような道のりを辿るかを見てみたかった。

次に松川さんにiphoneでたどってもらった。松川さんは普段から会話をしている途中で、視界に犬が入ってきたりしたら「犬!」と叫んで会話を変えたりする。撮影中も街の話をしてと思ったら「鳥肌が立ってる!」とか「乳首が!」とか身体の話に変わっていた。

パフォーマー 吉川永祐、北原明峰、松川祐実

吉川 永祐 Eisuke Kikkawa

1997年 鳥根県生まれ

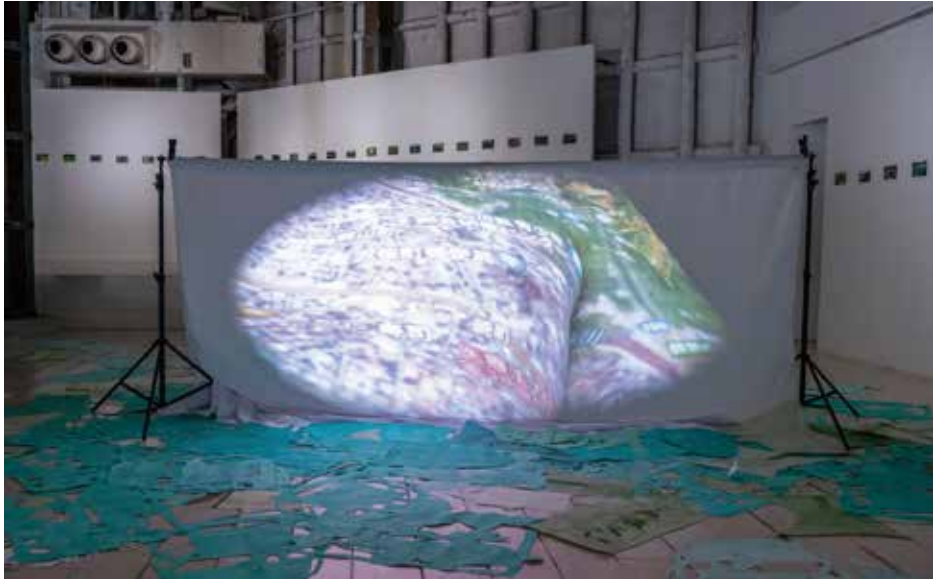
2021年 金沢美術工芸大学美術科油画専攻 卒業

現在 金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科絵画専攻油画コース 在学中

主な展示

2021年 「ストレンジャーによろしく」金沢小町(石川)

2021年 「内灘闘争 風と砂の記憶」内灘町歴史民俗資料館風と砂の館(石川)





川は街を分断し流れている。川に沿って歩く私は橋がないと向こう側へは行けない。川を歩くと、色々な人を見かける。犬の散歩をしている人やぼんやり立っている人、走っている人。それぞれの目的を持って川に来る人に混じって川沿いを歩く。皆目的があるのか無いのか分からない様子で川に佇んでいる。対岸の様子はあんなによく見えるのに私は橋がなければ向こうへ行く事ができない。

親しい人が時々とても遠くにいるように感じるようになった。毎日の中で少しずつゆっくりと人と人との関係が変わっていく。人に掛ける橋があって、私と誰かを繋げてくれたらいいのになあと思ったりする。誰かと話すとき、その人の表情や身振り手振りははっきりと見えるのに何を考えているかは ちっとも分からない。人との間に大きな川が流れているみたいに遠くて、心の中は見えない。こちら側にいるから分かる事と対岸に行ってみて気付く事が沢山ある。それでも私は生活が続く限り人と関わる事をやめない。

時々対岸にいる人へ目を合わせてみたり、手を振ったりしながら私はまた歩きはじめる。

北原 明峰 Akiho Kitahara

自身の生活の中で感じた事を元に絵画を制作している。普段は物事の移りや人との関係などを風景を通して描いている。
今回の展示では人と人との境界や心を伝える事の難しさをテーマに描いた作品群を展示する。

1997年 石川県生まれ。

2019年 金沢美術工芸大学美術科日本画専攻 卒業

2021年 金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科絵画専攻日本画コース 卒業

現在 YAA YAA ART STUDIOで講師として活動中。

主な展示

2021年 個展「なんとなく暮らしている」芸宿(石川)





住宅や民家にある植木や庭をモチーフに、人の曖昧な意識と植物との関係について制作している。人の暮らしの中でインテリアやオブジェ、またはベットとして多様に扱われる植物は、同時に生命があり人間の意図しない動きをする。植物と人間がお互いにどう影響を受けながら生きているのかという関係性そのものに興味を持っている。主に油彩、アクリル絵具を用い平面絵画を制作してきたが、近作ではリトグラフや孔版印刷などの版画技法を用い、植物の繁殖と美術の複製について関連付けながら研究・制作をしている。今作では紙版画技法を用いて芝生に見立てた版画作品を制作し、気候や生育環境によって形が変わりやすい植物の姿を元に、作品を会場に固定せず、観客の接触も可として作品の折れ曲がりや、移動を意図的に作る試みを行った。

松川 祐実 Yumi Matsukawa

1996年 長崎県生まれ

2020年 金沢美術工芸大学美術科油画専攻 卒業

現在 金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科絵画専攻油画コース 在学中

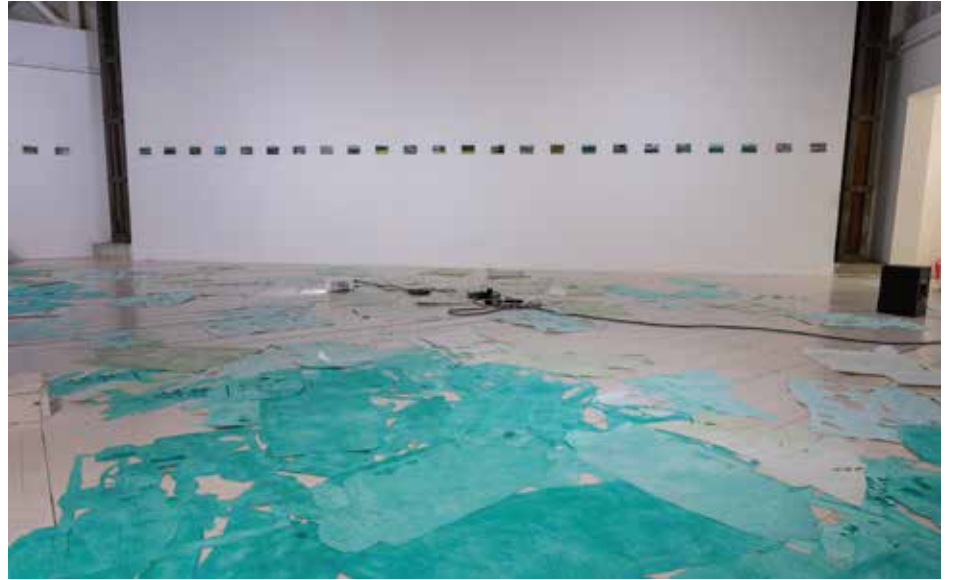
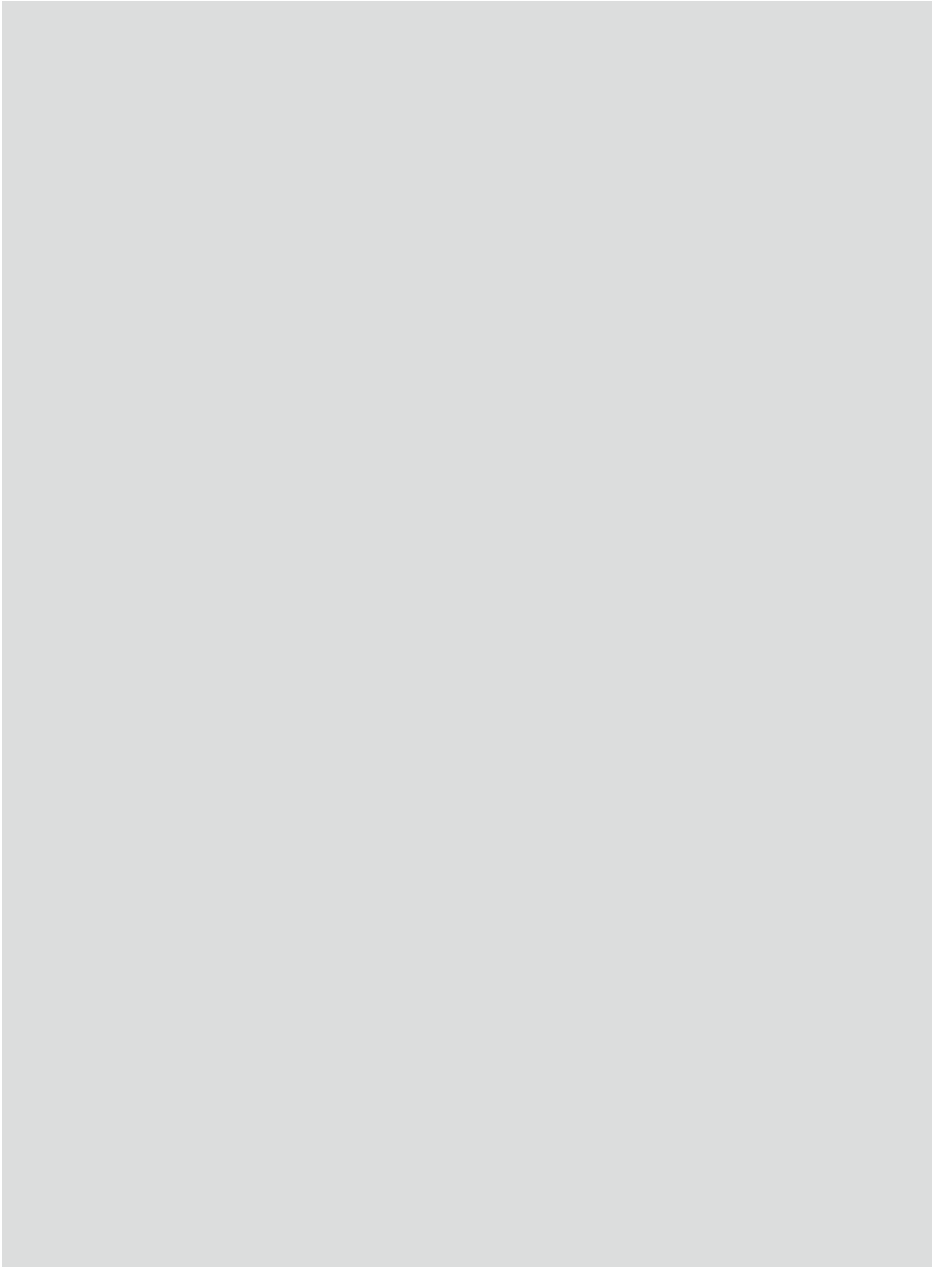
主な展示

2017年 個展「あなたの外、わたしの中」芸宿(石川)

2018年 グループ展「日本画油画5人展」北陸銀行橋場出張所(石川)

2018年 個展 金沢 北陸銀行橋場出張所(石川)

2019年 個展「生きていたこと」kapo(金沢アートポート)(石川)



「ズレをまどろむ」

いつもはスニーカーを履いているのだけれど、寒そうだしなと思って金沢にはノースフェイスの暖かいブーツを履いていった。そのおかげで、公園や河原に積もった雪を思う存分踏むことができた。ぐい、ぐい、と雪が押し固められて軋む音が頭に残っている。積雪の中を歩くなんて何年振りだろうか。展示「何かを忘れていたような気がする。」のことを思い出す時、展示空間と同じくらい周囲の環境のことが頭に浮かんでくる。私が普段京都に住んでいて、金沢にはたった数日間だけれどトークのために滞在したというのが大きいのかもしれない。旅行と言ってもいいかもしなかった。自分がそこに居たという時間の印象が強くて、その中でいろいろな出来事や空間があまり区別なく、時間に包まれて思い出されてくるというか。

展示会場に入るとまず靴をスリッパに履き替え、作品の上を歩いていった。生活の中に共有するような鉢植えの植物たちを描いた版画が床に敷き詰められ、その日は展示の最終日の前の日だったから、作品はそれまでの来場者たちが通った痕跡を示すようにところどころ折れ曲がったり、擦れて色が薄くなったりしている。本物の植物だってそうだった。何かがある上を通ると、ひしゃげたり千切れたり、その体でもって他の生き物たちの行動を記憶している。歩いたり、何かに触れたりする、それだけで間接的に誰かの記憶に触れている、触れてしまっている。それって危ういことかもしれないけれど、足元の絵の中の植物は鉢植えに覆われているから、簡単には壊れそうになく、そのことに少し安心した。

色の濃い植物が密集しているところにはスクリーンが立ち、近辺のGoogleマップが映されている。Googleマップは波のようにうねり続けていて、何か生き物みたいだなと思いつつ眺めているうちに、それが人の体であるということに気づく。一度人の体に見えると、「生き物みたい」とさっきまで思っていた、その喩えの、考えの曖昧な行き先のようなものが消え、体という具体的なものばかりが存在した。この空間のバランスは何なんだろうかと不思議だった。植物っていう匿名なものに脇毛や乳首といった生々しいものが覆われている。その周りの壁には小さな絵が架けられていた。

あとで作家本人に聞いたところによるとその川は展示会場のすぐ近くを流れる「犀川」という名前の川で、何十枚もの絵として河原の光景が並んでいた。けれど、どの絵に描かれる景色にも見覚えがあるような気がした。それはたとえば私が暮らす京都にある鴨川沿いで見たことのある景色に思えたり、何かの映画だったりアニメだったりの中に見たことが

あるように思えた。河原を散歩する見知らぬ人の後ろ姿。橋の真ん中あたりから眺める川の眺めと青空の広がり。草原(ルビ:くさはら)の上に落ちている、白い猫とか生き物と見間違えそうなビニール袋。犀川を描いた絵はどれもどこか牧歌的で、さびしそうで、日本のどこにでも見られるような川や、川というものへの私たちのイメージを巻き込むようだった。

似ているかも、と思うのだった。川の絵が醸し出す具体性と一般性は、植物の版画を踏むことと、体に投影された地図を見ている時に頭をよぎったものと近い気がした。こういうことが何度もあった。この展示を観ている間、それぞれの作品について考えたことが、他の作家の作品や空間全体に感じたことと何度も重なり、でもきっと大事なものは重なりそのものというより、重なったことで現れてくるズレなんだろう。

いくつかの映像があった。階段と、階段を登って奥の壁に投影された映像にはやっぱり体が映っていた。作家の体に、他の作家たちが記憶を頼りに近辺の地図をマジックで描いていく。地図を思い起こすということを通しての生活の痕跡だとか記憶を別の人に塗り込んでいくのはちょっと呪術的だったり、儀式みたいにも思えた。描かれる側と描く側の非対称性がここでは溶け合うようにぼんやりしている、というか、見え過ぎていてかえって見えているということに気づきにくい、みたいな状態にこの展示全体がなっているような気がした。誰かに体を触れられている時は確かに自分の所在を実感するのに、触れる側に回ると急に何もかもがわかりにくくなる、これで合っているのかなと不安になったり、でも親密さがあれば楽しかったりする、そういった「ズレ」の中をずっと漂っているような感覚。どこか不気味で、どこかリラックスする雰囲気がある場に満ちていて、奥の壁に投影されている映像が表す、場所の伝言ゲームでも言うべきもの。この展示を観ることによってそのゲームをプレイするのではなく、ゲーム自体に自分の体になってしまっているような。ズレになって、ズレに慣れてしまう。そうして外に出るために展示空間に戻って行くと、行き道のりで川や植物に感じていたものがうまく思い出せない。まるで自分が植物に近づいてしまったみたいに植物を踏むこともなんだかぼんやりとしていて、スリッパをブーツに履き替えるとびっくりした。

2021

企画募集期間：2021年7月20日(火)-8月31日(土)

審査日：2021年9月14日(火)

審査員：

黒澤伸(金沢市民芸術村総合ディレクター)

後藤徹(金沢市民芸術村村長)

宮崎竜成(金沢市民芸術村アート工房ディレクター)

モンデンエミコ(金沢市民芸術村アート工房ディレクター)

審査のポイント：

・アート工房の空間を意識した内容であること。協働で企画を練っていくことのできる余地があることなどが、審査の争点となった。

結果発表 2021年9月〇日(日付確認中)



第1回打合せ 2021年9月27日(月)

アート工房にて

作家3名とアート工房ディレクターの初顔合わせ。

会場下見、展示企画のヒアリング、今後のスケジュールについて。

第2回打合せ 2021年10月25日(月)

アート工房にて

展示内容、フライヤーについて

第3回打合せ 2021年11月22日(月)

Zoomにて

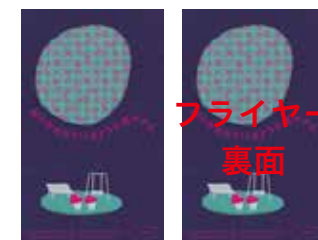
展示内容、アーティストトークについて



2022

フライヤー完成：2021年12月1日(水)

フライヤーデザイン：桐本清花



第4回打合せ 2021年12月20日(月)

アート工房にて

展示内容及び搬入出、会期中の運営について

搬入 2022年1月13日(木)・14日(金)

作家3名とアートアンツ協力のもと、2日間で設営を行った。

会期 2022年1月15日(金)-23日(日)13:00～19:00

来場者数：227人

アーティストトーク 2022年1月23日(日)18:00～19:30

ゲスト：大前栗生(小説家)

作家：吉川永祐・北原明峰・松川祐実

司会：モンデンエミコ

映像撮影：宮崎竜成



搬出 2022年1月23日(日)〈会期終了後〉・1月24日(月)

『アート工房の原点回帰』— 私たちは何かを忘れている？

金沢市民芸術村アート工房では2021年度、新たなアクションプラン事業として、9日間の会期で開催するクリエイション企画を公募しました。そこに採択されたのが『何かを忘れていたような気がする』です。それにしても何と曖昧なタイトルなのでしょう…いったい何を忘れていたのか、いや、そもそも本当に忘れていたのか…この、わからない・みえない・確定しない優柔不断さ、危機感とも安堵感ともつかぬフワフワした(ザラザラした?)感覚はいったい…?

しかし私以外にも、このタイトルにあらがえないリアリティを感じる人はいるかもしれません。このテーマのもと、はたして3人の作家はそれぞれの日常と市民芸術村をどう繋げ、この機会・この空間に何を試み、確かめようとしているのか、その場は人と人との間に何を交感するのか、すなわち、参加者・目撃者はそこでどのような感覚や記憶を呼び起こし、また、書き換えることになるのか。かくして起こる不確定で多様な展開とその先に生まれてくる何かに大いに期待したいと思っています。

さて、公募時点でアート工房から発したステイトメントでは、その求める内容を「工房と企画者で共に作り上げる実験の場(Sym-な場)となれるような、そんな意欲が伝わる企画」としています。ここであらためて空間:「場」を最大限に意識していることを、まずは確認しておきたいと思います。企画者による介入が場を変化させると同時に、場もまた企画者の実践に作用してゆくような展開に期待しているわけです。つまり、誰&何をもち許容し、関わる皆によりアイデンティファイされ、新しい経験を生み出してゆくような場のことです。

原状復帰を原則として「火さえ出さなければ何をしても良い(←あくまで理念的には、ですが)」とされる市民芸術村の工房は、かつてここにあった紡績工場がものづくりの場であった歴史を引き継ぎ、表現を創造するための実験・稽古の場としてリ・スタートしました。以来25年間、様々な挑戦を引き受けてきた歴史があります。立地が地域性を反映することはあるにせよ、アート工房の特性とは、敢えていえばホワイトキューブのそれでしょう。つまり、何をしでかすのかによって千姿万態するカメレオンのような可能性があるという意味で。「Sym-企画公募」は、25年を経た工房が、あらためてクリエイションの『場』として原点回帰しようとする企画でもあるのです。

黒澤 伸 (金沢市民芸術村総合ディレクター)

記念すべき第1回金沢市民芸術村アート工房「sym-」企画展「何かを忘れていたような気がする」の会場に入った瞬間に、私は15年前に、初めてこの空間に立った時の記憶が蘇った。

笑われるかもしれないが、ここには何かがあるような、怖いようで、何か懐かしいような、そして誰かが話しかけてくるような、、そんな不思議な感覚を感じたのである。

今回の3人の若きアーティスト北原明峰さん、松川祐実さん、吉川永祐さんが私と同じような気持ちを感じたかは定かではない。だが、少なくとも作品に表現された犀川沿いの見慣れた景色や足元から伝わるアスファルトや草の感触、あるいは自らの肉体に刻印された地図を通して、この空間に潜んで何かに話しかけ、あるいは失われた時の道案内をしているに違いないと感じた。まさに、「あなたが何かを忘れてしまった事を私たちの作品に触れて思い起こしてほしい」と、アーティストはメッセージを伝えているのだ。だからかもしれないが、通常の作品を「見る」というより、「歩く」に近い感覚でこの空間を楽しめたのも新しい発見だった。

改めてsym-プロジェクトを振り返ってみる。「sym-」は「共に・同時に」を意味し、symmetry, symbol, symphonyなどsymが頭に付くことで後ろの単語を補う役目があり、ディレクターと市民がーから協働して「sym-な場」となる展示会をここから発信するという。

正直、はじめは何を言ってるのかよくわからなかったが、この展示会の階段を登り、会場を見渡せる丘から俯瞰して眺めてみると、この展示会で何を伝え、何に共鳴してもらいたいかが本当によくわかった。

この場は、かつて紡績工場の倉庫であったところだ。100年以上の歳月をかけてどんな人がここにいて、どんなことが起こったのかは、もはや想像するしかない。しかし、アートの力で創造することで、記憶は蘇り、人々はsymパシーを感じ合い、symフォニーを奏でていけることが実感できた。

アーティスト北原明峰さん、松川祐実さん、吉川永祐さん、ディレクターのモンデンエミコさん、宮崎竜成さん、そしてアートアンツの皆さん、本当に素晴らしい展示会をありがとう。芸術村に潜んでいるみんなを代表して心からお礼申し上げます。

後藤 徹 (金沢市民芸術村村長)

何かを忘れてしまう前に、

2021年7月某日、私ともう1人のディレクターのモンデンエミコさんと、どうしたら北陸に住む人々がアート工房という特異な空間を目一杯使い、考え、実践をする状況を作れるのか話し合っていた。金沢市民芸術村はそもそも会場を貸し出しているため、日頃からたくさんイベントがアート工房で行われている。それは非常に重要な役割を持つ一方で、「誰でも使える」という性質上、アート工房という巨大で異質な階段構造を持つ空間にどのような状況を作り出すのか、いわゆるサイトスペシフィックな状況に自覚的であるものばかりではない。

「ディレクターをやるからにはこの空間をどのように使い、どのように育んでいくのか、北陸に住む様々な表現を行う人たちと一緒に検討する機会があるといいなあと思います。」

こうした私の一言に対して、アート工房の空間をディレクター2人と一緒に考えることと展覧会を作ることが地続きとなるような北陸在住者限定の企画公募をしたらどうかと話が盛り上がり、第一回目の開催が決まった。

Symは「共に」という意味を表す接頭語であり、2人の家の近くにあるスーパーの休憩所で悩みながら決めたものだ。「共に」在るということ素朴に信じることは連帯を盾に個人を収奪する事にもなりうる。だからこそ、複数で何かを行い、出来事を醸成していく手立てに自覚的であろうとするために、ストレートな「共に」を検討したい。私個人は、そういう気持ちをこの企画タイトルに込めている。

第一回に採用されたのは金沢美術工芸大学の在學生と卒業生で組まれた展覧会であった。私自身、金沢美術工芸大学の博士課程に在学しながらディレクターを務めているため、3人のことはよく知っている。展覧会の準備は定期的に行われる会議によって進行していたが、日常的に相談の連絡やファミレスで議論を行った時もあった。仕事をする事と展覧会を作ることが生活する中で相互に切り分けられ混じり合っ

＝

本展覧会は展覧会を表象すべき柱を持たず、どこか掴みどころのないものであった。ただし、それはただ曖昧であると言った具合ではなさそうで、むしろ、会場の中をグルグルと歩き回り、その都度感触を確かめていくような、そんな経験と言った方がしっくりくる。故にここに描こうとするのも、全体について包括するのではなく、個別の経験から緩やかに運動を紡いでいく方が良さそうだ。

松川祐実の作品は、作品を芝生として経験させるような仕組みであったが、むしろ私は描かれているものと松川との距離が気になった。紙に刷られているのは匿名の花壇や空き地など、それを見る主体との距離が明確な風景であり、芝生としての感触や質感が想起されるものでは決してない。故に作品を踏むという経験が芝と足、雑草と足、と言ったような接触の感覚と結び合うことなく宙吊りにされ続けてしまう。そんな違和感を持ったまま階段状の空間を上り、下を俯瞰してみると、そこには距離がありすぎて何が描かれているのかわからない緑の物質が生い茂っている様子が広がっていた。作品に描かれる距離が、展示空間の物理的

な距離によって無化されてしまう。松川が何を眼差しているのか、その距離に入り込めない違和感は、作品と私の物理的な距離に巻き込まれることによって「この」空間独特なものとして変形する。

北原明峰の作品は、川を媒体としてこちら（此岸）とあちら（対岸）の距離や隔たりを表現している。およそ100枚近くにおよぶ絵画群は金沢市民芸術村のすぐそばを流れる犀川を実際に歩きながら描いたものであり、鑑賞者も作品群を歩きながらみることによって北原の視点を追認する構造となっている。川の対岸では遊ぶ人や犬の散歩をしている様子が描かれているが、どのような人物か、ペットはどんな犬種かそれぞれ把握することはできない。一方で絵画群の合間合間には、地面に落ちたゴミのクローズアップが無機質な筆触で克明に描かれている。対岸の景色は非常に見晴らしが良いのに、そこで何が行われているのか、誰がいるのかははっきりと見る事ができない。一方で、クローズアップされたゴミはそれ以外の周りに状況が見えない代わりに、その質感は生々しい固有名詞を持って知覚される。環境から何かを際立たせ、それと個別の、生のやりとりを行うにはそれぞれにその都度接近するしかない。一望できる安全な距離ではむしろ何も見えはしないのだ。

吉川永祐の作品は、自宅から金沢市民芸術村までの道のりを自身の体に描く事で地図を作成するものであるが、ここでも体感されるのは距離のスケールの錯綜である。映像では自宅から会場までの道のりという距離を自身の有限な身体に縮約し、さらにそれをカメラで辿る事で身体スケールを反転させるといった様々な折り重なりによって、吉川自身の身体を様々な距離を含む環境として作り替えているように見える。また、吉川自身の身体がプロジェクターに移される事で、アート工房の壁や床の質感が映像の皮膚の質感と重なり合い、身体は会場の空間自体にまで浸透し、質感のヴァイブレーションを引き起こしていた。ただし、これは光学的に映された現象であり、映像と壁の質感を確かめようと近づけば、自身の身体が影となって映像は阻害される。こうした事態も鑑賞経験に含まれる身体的な距離とスケールなのだと感じられたのは、展覧会を漂う掴みどころのなさによるものでもあるだろう。全体をつかめないからこそ、その都度の経験をしっかりと握り締めなければならないからだ。そうでなければ、小さくても大事な何かを忘れてしまうような気がして。

このように会場では様々な距離が錯綜し、折り畳まれ、鑑賞者を巻き込みながら固有の運動を形成している。もはや展覧会は作品のイメージを把握し、一望可能な距離を示すものとしての場ではなくなった。作品に描かれたイメージで理解するのではなくイメージがどうしようもなく見えなくなってしまう状況の中でそれでもそこに広がっている出来事として何かがあるのだと気づいた時、作品は初めて環境になれる。

展覧会を出るときに渡される3人の作品が入った瓶は私の車のボトルホルダーに無造作に投げ込まれ、今もずっと放置されている。運転するたびに振動でカランカランと音を立てるそれをいつか開けたとき、そこでは何が思い出されるのだろうか。

宮崎竜成（金沢市民芸術村アート工房ディレクター）

Sym-企画公募2021

何かを忘れていたような気がする。

出品作家：吉川永祐・北原明峰・松川祐実

会期：2022年1月15日（土）—1月23日（日）

時間：13時～19時／入場無料

会場：金沢市民芸術村アート工房

（石川県金沢市大和町1-1）

主催：金沢市民芸術村アクションプラン実行委員会

共催：金沢市、公益財団法人金沢芸術創造財団

企画・担当：金沢市民芸術村アート工房ディレクター 宮崎竜成、モンデンエミコ

発行日：2022年3月31日（仮）

カタログデザイン：村田裕章

写真撮影：中川暁文

発行：金沢市民芸術村アート工房（石川県金沢市大和町1-1）

TEL：076-265-8300（代表）

本書の全文または一部の無断での転載、複製はご遠慮ください。
乱丁落丁、その他ご不明な点がございましたら上記までご連絡ください。